今年もタイ・バンコクでセミナー

先端建設技術センター

先端建設技術センター（ACTEC、北橋建治理事長）は14～15日、日本のゼネコンやメーカーが開発した建設技術を海外で発信するセミナーを昨年に続きタイ・バンコクで開いた。「洪水調整」「地盤改良」「護岸」の3分野で公募した13技術を紹介した2日間にわたるセミナーには、現地政府や建設業界の関係者らが多数来場。「タイの建設業界に役立つような新しい技術を学びたい」（タイ建設業協会のサンウォーン会長）と、同国のインフラをめぐる諸課題の解決につながるプレゼンテーションに熱心に耳を傾けた。

（編集部・岩本英司）

「洪水調整」「地盤改良」「護岸」、3分野13技術売り込み

2日間で延べ324人

セミナーは「Seminar on Japanese Construction Technology in Thailand 2016」として開かれ、国土交通省、駐タイ日本大使館、国際協力機構（JICA）が後援した。会場の日本大使館には2日間で延べ324人が来場。3日間で約320人が訪れた前回（2015年9月15～17日）を上回る盛況ぶりとなった。

前回は、今回の3分野に「省力化」「免震・制震」を加えた5分野から抽出した13社18技術のプレゼンが行われた。ACTECでは、タイのインフラニーズに一層的確に応えようと、公募対象を3分野に集約。13社の13技術を抽出した。半分の社は初参加で、国内の合同説明会やプレセミナーなどを通じ、本番でのプレゼンとポスターセッションに向けた準備を進めてきた。

プレゼンで割り当てられた時間は質疑を含めて1社20分。通訳を介さず、すべて英語で技術を紹介した。限られた時間内で特色が伝わるよう、企業紹介などは極力排し、インフラをめぐるどのような課題を解決できる技術なのかに的を絞って説明を行った。会場前方に映し出すプレゼン資料に動画を交えるなど、各社がさまざまな工夫を凝らした。

両日とも午前、午後に分けて3～4技術ずつプレゼンを実施。その都度、会場外のスペースでポスターセッションが行われた。

実物や模型もブースに展示

前回と同様に技術概要をパネルで紹介するのに加え、実物や模型を置ける台や商談用のテーブルも設け、来場者が興味を持った企業のブースを訪ねやすくなるように配慮。こうした工夫も奏功し、来場者が担当者からより詳細な説明を聞いたり、コストなど突っ込んだ質問をしたりする場面があちこちで見られた。

ポスターセッションには、日本語を使いこなす現地の通訳も配置。インタビュー形式で各ブースの技術を順次紹介していく試みは評判も上々で、ACTECスタッフも手応えを感じたようだった。

インタビュアーを務めた通訳のベストさんは、「各社の皆さんから事前に技術の内容を聞き、プレゼン資料も参考にしながら台本を作りました。インタビューでは、技術の特徴やメリットを中心に話を聞くことを心掛け、その内容をタイ語でできるだけ分かりやすく来場者に説明できるように努めました」と2日間を振り返った。

模型の展示が来場者の興味を引いたポスターセッション

通訳の女性がタイ語で技術を分かりやすく伝えた

インフラめぐる課題解決へ

現地の建設コンサルタント企業109社を束ねるタイコンサルティングエンジニア協会（CEAT）のスポット会長は、日刊建設工業新聞の取材に「タイでどんな技術が必要とされているかをお伝えしたわれわれの要望にも応えるセミナーだった」と評した。

「質高いインフラ」に貢献

2回目の開催で、ACTECのタイにおける取り組みにますます期待が高まっている。北橋理事長は「こうした活動は継続することが大切だ。ぜひ来年も実施したい」と強調。日本の優れた技術を海外に紹介することで、政府が掲げる「質の高いインフラ輸出」に貢献していきたいと意欲を見せた。

4月に着任した増竜郎技術調査部長は、「現地政府からは、もう少しテーマを絞り、ワークショップのような形で開催するニーズも出ている」と話し、次回以降、今回のようなセミナーとも両にらみで日本の技術を的確に海外に紹介する手法を模索していく構えだ。

前回に続き参加した西松建設土木事業本部土木設計部の平野孝行氏は、「セミナーで寄せられる質問が糧になり、次の技術の進展につながる」とし、技術のスキルアップで東南アジアのインフラ需要に貢献していきたいと話した。

再度詳細な説明ニーズも

前回参加した1社が現在、タイ企業との業務提携に向けて協議中など、セミナーで紹介した技術の海外展開が実りつつある。今回のセミナーでも、「RID（王立灌漑局）からあらためて詳細な説明をしてほしいという話を持ち掛けられた」（西尾レントオール）、「RIDの方たちが数多くブースを訪れ、熱心に質問していただいた」（共和コンクリート工業）、「ブースで頂いた名刺に記載されたメール宛てに詳細な資料を送ることにした」（清水建設）、「使用する機械のコストがどれぐらいかなど細かい質問が寄せられた」（パワーブレンダー工法協会）と、手応えを感じられるイベントとなった。

各社が今後の海外市場への進出や事業拡大を狙って参加した今回のセミナー。「紹介した技術の売り込み先をどの地域にするか早く見定めたい。タイも有望国の一つ」（日立造船）、2020年東京五輪後の国内需要の縮小を見据え、「セミナーをきっかけに東南アジアへの展開を図っていけるようにしたい」（ケミカルグラウト）など、タイを中心にアジアのインフラ市場に技術で切り込もうとする各社の意欲が伝わってきた。

日本の技術ぜひ役立てて

北橋理事長

日本の国土は、地震や洪水という頻発する自然災害、軟弱な地盤という厳しい環境下にある。この厳しい国土を支えているのは、日本の建設技術だ。

2011年に起きたタイの大洪水で当センターの職員が国際緊急援助隊として、日本の技術を用いて排水作業をお手伝いした。この経験を機に、タイの国土も日本と同様、またはそれ以上に厳しい環境にあることを知った。

日本の建設技術がタイでもお役に立てるのではないかと考えて昨年、海外では初のセミナーを開催し、18技術を紹介したところ、現在、タイ企業との業務提携を検討中の会社もある。

このセミナーの役割は非常に大きいと思い、引き続き2回目のセミナーを開催することにした。

1月から約3カ月間、日本企業から建設技術を公募し、タイに役立つ13の技術を抽出した。2日間にわたり各技術のプレゼンテーションを行う。ホール入り口には各技術の概要を示すポスターも展示する。

聴講いただく皆さまには、タイのポテンシャルユーザーである行政機関や建設企業、建設コンサルタントから多く参加いただいている。興味のある建設技術があれば、ぜひ積極的に出展企業への質問やコミュニケーションをしてほしい。

最終的には技術の採用につながり、タイのお役に立つことができれば、主催者としてこの上ない喜びだ。

日本の技術を紹介するセミナーに多くの来場者が詰め掛けた＝バンコクの日本大使館で

セミナーのプログラム

（技術分野＝①地盤改良技術②護岸・盛り土技術③洪水・排水対策技術）

【9月14日】

■**開会あいさつ**　先端建設技術センター・北橋建治理事長

■**祝辞**　駐タイ日本大使館・佐渡島志郎大使＝**写真（1）**、タイ王立灌漑局（RID）・ソムキャット副局長＝**写真（2）**

～フォトセッション～

■**基調講演**　日本の建設技術とその適用性に関するタイの需要～TEAMコンサルティングインターナショナル・チャワリット社長＝**写真（3）**

■**建設技術に関連した日本のプロモーション活動の紹介**　先端建設技術センター・増竜郎技術調査部長＝**写真（4）**

■**プレゼンテーション**

◇清水建設　高性能TBM③

◇ユニチカ　ジオテキスタイルを用いた軟弱路床上舗装①

◇ケミカルグラウト　GEOPASTA（ジオパスタ）工法①

～ポスターセッション～

◇パワーブレンダー工法協会　パワーブレンダー工法①

◇芦森工業　パレスシート工法①

◇西尾レントオール　3Dマシンコントロールシステム（モーターグレーダー）②

◇西松建設（ハイグレードソイルコンソーシアム）HGS短繊維混合補強土工法②

～ポスターセッション～

■**基調講演**　日本のメンテナンス技術～国土交通省総合政策局公共事業企画調整課、新田恭士企画専門官＝**写真（5）**

【9月15日】

■**祝辞**　バンコク都（BMA）・スラート水質管理部長＝**写真（6）**、タイコンサルティングエンジニア協会（CEAT）・スポット会長＝**写真（7）**、タイ建設業協会（TCA）・サンウォーン会長＝**写真（8）**

～フォトセッション～

■**基調講演**　チョーカンチャンによる主な建設プロジェクトの紹介～チョーカンチャン社・プリュー会長＝**写真（9）**

■**プレゼンテーション**

◇日本国土開発　ツイスター工法①

◇共和コンクリート工業　環境保全型覆土連結ブロック工法②

◇荏原　大型排水ポンプおよびポンプシステム③

～ポスターセッション～

■**基調講演**　タイにおける日本の建設会社の取り組み～バンコク日本人商工会議所建設部会、小野昌邦鹿島道路執行役員〈海外担当〉＝**写真（10）**

■**プレゼンテーション**

◇技研製作所　油圧圧入工法およびインプラント構造物②③

◇三信建設工業　従来技術から大きく進化した薬液注入工法―マルチストレーナ工法①

◇日立造船　陸上設備型フラップゲート式防潮堤技術「neo RiSe」③

～ポスターセッション～

■**講義**　東京における地下工事の効果的な利用～先端建設技術センター・吉田延雄理事＝**写真（11）**

■**閉会あいさつ**　先端建設技術センター・増竜郎技術調査部長

（1）

（2）

（3）

（4）

（5）

（6）

（7）

（8）

（9）

（10）

（11）

興味深い話題提供も

鉄道工事で日本・中国勢競う

日本企業の技術を紹介する今回のセミナーでは、佐渡島志郎駐タイ日本大使や現地政府、業界関係者が祝辞を寄せるとともに、両国のインフラに関連した興味深い話題を提供する基調講演なども行われた。

この中で「日本の建設技術とその適用性に関するタイの需要」と題して講演した現地大手コンサルタント会社、TEAMコンサルティングインターナショナルのチャワリット社長は、バンコクで進行中の鉄道プロジェクト（レッドライン）で中国勢と日本勢が施工を手掛ける工区が同時並行で進められていることを紹介。日本工区はイニシャルコストが高くなるものの、「効率も良く、長持ちすることが施工途中の現場を見るだけで分かる」として、日本の優れた技術が同国のインフラに貢献している一例を示した。

排水の大規模プロジェクトを手掛けるバンコク都（BMA）のスラート水質管理部長は、セミナーを通じての技術移転に大きな期待を寄せた。タイ最大手の建設会社のチョー・カンチャン社のプリュー会長と幹部は、同社が手掛けるダムなど大型プロジェクトを映像を交えて紹介した。

国土交通省の新田恭士総合政策局公共事業企画調整課企画専門官は、インフラ点検や災害対応で次世代ロボット技術の導入に向けた取り組みが日本で進められていることを紹介し、来場者に「新たな技術を育て、豊かな国際社会を築こう」と呼び掛けた。

ACTECの吉田延雄理事は、タイでも需要が高そうなシールドなど地下空間を活用したインフラ整備に貢献するさまざまな技術を取り上げたレクチャーを行った。

現地最大手の現場視察

施工が進む「ブルーライン」のトンネル内

セミナーに参加した日本企業各社の一行は16日、タイ最大手の建設会社チョー・カンチャン社が施工する大型建設プロジェクトの現場を視察。現地の建設事情を知る貴重な機会を得た。

見学したのは、地下鉄MRTの「ブルーライン」と「グリーンライン」と呼ぶプロジェクト。ブルーラインで同社は、地下部分の2・6キロのトンネルや途中の駅舎整備などを担当している。

途中にある幅200メートルの河川の下を含めたトンネルを1日12メートルの速度で掘り進めたことや、さまざまな地層への対応、1台のマシンで2本のトンネルを施工したこと、セグメントの自社製作など、各社が興味を抱く技術面の対応について質疑が繰り広げられた。

一方、高架部分が14キロのグリーンラインの現場では、敷地が10万平方メートルにも及ぶバンコク郊外の広大なデポ（車両基地）などを見学。現地の地盤を考慮して径60センチ、長さ35メートルの杭を1万1000本打ち込んだことなどについて説明を受けるとともに、「発注時にどの程度仕様が決まっているか」など、各社が日本でのケースを想定しながら、タイの建設事情を尋ねて歩いた。

◆次回の「ワールドワイド」は10月12日付に掲載予定です。